TOPICS

畳の意匠（タタミって、いいね！）

黒田幸弘　遊民建築研究所

畳の現状

現代の住宅においては洋風化が進み、畳の部屋がどんどんなくなってきている。あったとしても、せいぜいLDKの横に申し訳なさそうに客間と称してついている程度で、どれだけ利用されているかはわからない。畳の利点としては、吸音性がある、弾力性がある、断熱性がある、調湿性があるなど人の五感にやさしいものが挙げられる。設計者としては、皆そのような利点を理解していると思われるのだが、どうして最近あまり使われていないのであろうか。

畳の不利な点を挙げると、コストがかかる、下地工事に手間がかかる、手入れが面倒である、田舎くさくて現代的でないなどが挙げられる。しかし一番は、住まい手が畳を求めていないことが大きい。このような点が実際あるにはあるが、設計者としてそれを超える優れたデザインを示せたならば、もっと使ってもらえるのではないだろうか。日本古来より伝わってきた畳という良き伝統を後世に伝える義務も設計者にはあるのではないかと最近思うようになった。

畳表・い草

まず、畳表に使われるい草の種類として、丸い草と七島い草が挙げられる。日本でつくられる丸い草（**写真1-左、図1**）の95%が熊本県でつくられており、肥後表の名称で親しまれてきた。代表的な品種として「夕凪」「ひのみどり」「ひのはるか」「ひのさらさ」などがある。それに対して七島い草は三角形の断面をしており（**写真1-右、図1**）、通常のい草の3～5倍の強度があると言われている。その強度を生かして、隅にも強度を必要とする縁なし畳に最適な素材であり、琉球畳として広く知られることとなった。このい草の違いは実際に見ると、見た目も感触も全く違うので、実際に見て感じてほしい。

そして床の間の畳として利用される流鬢表。これは目の間隔が広く、渋茶色の特徴を持つ（**写真1-中央**）。また、丸い草を通常の畳表より経糸の間隔を狭くして、畳の目を細かくした目積表（**写真2-右下**）。そのほかにも綾波表・生成表・市松表・彩園表・刺繍表など、さまざまなものが存在する（**写真2**）。設計者としては、その部屋の雰囲気やイメージで上記のどのような畳表を使うかがセンスを問われるところである。

畳表・和紙・ポリプロピレン

その他の素材として和紙を加工した和紙表、ポリプロピレン製のPP表などがあり（**図1**）、和紙を利用して染色したカラー畳はさまざまな色の展開がある（**写真3**）。現代的なデザインの和室をつくるときには非常に有効な素材である。畳を使うから田舎くさくなるというのはそもそも間違いで、使い方によってはとてもモダンで新しい空間が誕生するはずである（**写真4**）。

また、ポリプロピレン製の畳は、水廻りでも使用することができ、浴室や車椅子を使う介護施設などにも使用されている。何年か前に訪れた蓼科温泉ホテル親湯では、浴室の洗い場一面に畳が敷き詰められており、子どもたちは何の心配もなく走り回り、赤ちゃんも畳の上に寝かされていて、これは素晴らしい畳の使い方だと思った覚えがある（**写真5**）。なぜ人が無防備な裸になる浴室という場所の素材に、石やタイルなどという硬いものばかりが使われているのか疑問に思ったことはないだろうか。当然転んだら怪我をするのは当り前で、打ち所が悪ければ死に至ることもある。これは人の命より、水仕舞や浴室の耐久性に重きをおいた結果ではないだろうか。倒れる可能性のある場所では柔らかい素材にするのは設計者が一番に考慮すべきことで、使う人の安全を最優先に確保するという原点に立ち帰って、もう一度考え直してほしい。

畳縁

畳縁は畳床に畳表を固定する布製のものであるが、和室の美しさをつくるアクセントにもなっている。材質は麻・綿・合成繊維が使われ、地位や身分により繧繝縁や紋縁が使われてきた（**写真6**）。また、現在では高麗縁・高宮縁・松井田縁・光輝縁など、さまざまな模様のものが使われている（**写真7**）。古代や中世では身分が違えば使えなかったものも、今では自由に使えるというのも、かなり魅力的なことではないだろうか。ここでも畳表同様に、部屋の雰囲気やイメージで柄や色を選べるのは、設計者冥利につきると思われるが、いかがだろうか。最近では人気のキャラクターを使った柄などもでてきていて、人々の目を楽しませてくれる（**写真8**）。

形・その他製品

畳の形自体は通常3尺×6尺の長方形であるが、その他にも最近では縁なしの半畳の大きさの矩形のものが増えてきている。この方がハンドリングもよく、置き畳として使われることもある。数は少なく珍しい形ではあるが、丸や亀甲や麻の葉の形をした畳もある。

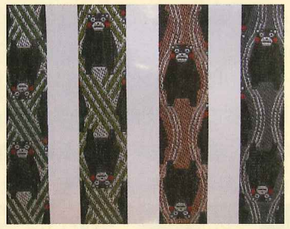
最近では、畳は床材以外の製品としても使われる例が増えてきている。たとえば、敷物（**写真9**）・財布・枕（**写真10**）・ブックカバー・栞・椅子・ソファーなど、中にはびっくりするようなものまである。このようなもので畳の香りや良さをわかってもらいたい部分もある。その中には何もここまでつくらなくてもというものもあるが、日本の文化として心優しく受け止めていただけたらと思う。

まだまだ畳のデザインや畳の使い方はあると思うが、日本の文化として受け継がれてきた畳をもう一度再考して使ってみたらどうだろうか。もし、その段階で畳のつくり手の意見が聞きたい場合は、質問に答えてくれるように畳の組合に窓口を設けてもらうようにした。住まい手が使う使わないは設計者の意図による部分も大きいので、畳を使った新しいデザインに挑戦してみてはいかがだろうか。

写真3　和紙を利用して染色したカラー畳

写真4　現代的なデザインの和室

写真5　蓼科温泉座敷風呂



左／写真6　繧繝縁や紋縁
中／写真7　現代の縁
右／写真8　くまもん縁

写真9　敷物

写真10　枕

黒田幸弘
くろだ・ゆきひろ
1967年東京生まれ。1990年早稲田大学理工学部建築学科卒業。1996年遊民建築研究所設立。読売理工医療福祉専門学校講師。「薄畳製品の普及に伴う製品の規格化」外部専門委員。「畳表等の表示に関する検討会」オブザーバー。住宅の設計を中心に活動中。ほかにも古建築の保存・移築も手掛ける

◎全日本畳事業協同組合
Tel.03-3836-3989

◎蓼科温泉ホテル親湯
Tel.0266-67-2020

◎資料提供
高田織物（株）、大建工業（株）、（株）大幸物産、全国い産業連携協議会、全日本畳事業協同組合、蓼科温泉ホテル親湯、森田洋（北九州市立大学准教授）

図1　い草の断面

写真1　左から丸い草、流鬢表、七島い草

写真2　目積表などさまざまな畳表